

「全国被災地語り部シンポジウム」開催

第8回全国被災地語り部シンポジウムが3月に和歌山県広川町で開催されます。

このシンポジウムは、東日本大震災から5年目の時に、宮城県南三陸町の「南三陸ホテル観洋」阪神淡路大震災被災地の「神戸市」「北淡震災記念公園」の3者の発案により始まりました。第1回はホテル観洋で開催されましたが、「稲むらの火の館」もお声がけいただき、参加させていただきました。それ以来、奇数回は南三陸、偶数回は関西というように開催されてきました。コロナ禍により、開催時期は延期されたりしたようですが、止まることなく開催され、時には外国の方の参加もあって、「国際シンポジウム」と名付けられたこともありました。災害は地震津波に限らず、全国の被災地から参加されてきました。

大きな災害を体験された高齢者や若い高校生等も参加され、それぞれの地域での防災対策等が話し合われてきました。

この度、「第8回全国被災地語り部シンポジウム」が広川町で開催されることになりました。

日時 令和5年3月18日

会場 広川町民会館・稲むらの火の館・広村堤防等町あるき

プログラム

10:00 広村堤防等(まちあるき)

11:00 稲むらの火の館 見学

場所・広川町民会館

13:00 開会(実行委員長挨拶・町長歓迎挨拶)

13:20 パネルディスカッション(全体会)

15:00 分科会1 災害語り部の取組みと歴史

分科会2 文化・社会・経済の語り部

16:30 全体会 報告・総括

「和歌山語り部宣言」 17:00 終了

シンポジウムでは、災害時の対策等も話し合われますので、災害に備えるためにも有意義な会合だと思います。多くの皆様のご参加をお待ちいたします。

講談「濱口梧陵物語」公開

本年の正月号でも少しお伝えしましたが、昨年12月に大阪梅田の阪急グランドビルでお披露目された『講談「濱口梧陵物語」』のDVDを頂戴いたしました。現在「稲むらの火の館」受付横で、公開しています。



講談 旭堂南龍 作 桂紋四郎

ほんまもんの講談ですから迫力があります。ぜひ、ご覧いただきたいと思います。

【第19回稲むらの火講座】

このことも、前号でお知らせしましたが、再度お伝えします。「第19回稲むらの火講座」を開催いたします。

日時 令和5年3月4日午後1時30分～

場所 稲むらの火の館3階

講師 城下英行先生(関西大学社会安全研究科・社会安全学部准教授)

演題 防災の学びには何が必要か

一良い実践をどのように活かすのか

新型コロナの感染も、まだまだ完全に終息したとは言えません。感染拡大を防ぐ対策をしながら開催いたします。そのため、今回も定員は60名です。開催についてご連絡しなければならない可能性もありますので、参加申し込みは必ずお願いします。

申し込み、お問い合わせは、電話0737-64-1760、ファックス番号は64-1761です。どちらでも結構です。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第23回 防火対策の充実度を読む

京都大学防災研究所の矢守克也研究室のチームは、内閣府が1980年代から断続的に実施してきた「防災に関する世論調査」を通覧して、防災に関する取り組みがおおむね上昇してきたことを指摘している。たとえば、家具の固定は、1984年に実施率6.8%であったが、2017年には40.8%となっている。食糧・飲料水の準備は、1987年に11.4%だったが、2017年には45.7%となった。

ところで、筆者が「防火対策」の項目だけ取り出してみたところ、実態は真逆であり、実施率は下降していることがわかった。「消火器や水をはったバケツの準備」は、1984年に31.6%の実施率があったが、2017年には20.2%であった。また、「風呂の水のためおき」は、1984年に24.3%だったが、2017年には18.9%となっていた。

「防災」全般と「防火」を分けてしまう要素は、どこにあるのだろうか。以下は仮説である。

1つ目に、社会情勢をふまえた「油断」がある。たとえば、2009年からの10年で、全国の火災死者数は1877人から1486人に減った。出火件数や負傷者数も減少傾向にあることから、防火対策を軽視する風潮が強まっているのかもしれない。

2つ目に、技術革新がなされて、個々人で取り組む必要性が減ったのかもしれない。防火・防煙対策が施された商品や消火・排煙装置が拡充されて、水バケツ等は無用と感じるようになった。

3つ目に、公共心の薄れが起きているのかもしれない。火災は他者を巻き添えにするから、なんとしても食い止めたいた危難であるが、「人のために」備える気構えが弱っている可能性がある。

そして4つ目に、経済格差の構造も気掛かりである。2つ目にあげた技術革新の果実を享受できているのは、都心のタワービルに住む人たちだけかもしれない。しかし、高齢火災のリスクは増大している。初心に立ち返って備えを進めよう。

【館長日記】

新年になって結構寒い日が続いています。

1月3日の夜7時のNHKニュースを見ていた時のことでした。「今日、北海道の陸別町でマイナス30.6度を記録」という放送がありました。

陸別町というのは、濱口梧陵さんが支援をした銚子の町医者「関寛斎」が蘭学医となり、徳島の蜂須賀家の御典医等を務めた後、晩年72歳になって、北海道の開拓に入ったところが陸別町だったのです。私は、平成27年にこの陸別を訪問したことがありました。当時の野下教育長に教育長室へお招きいただき、結構長い時間、「梧陵さんと寛斎さん」のお話をしたものでした。その後、「濱口梧陵生誕200年」記念の「濱口梧陵学」の御寄稿をお願いしました。その時、添付していただいた写真を再度掲載します。今回は、少しトリミングしましたが、-30度を記録した時の写真です。この場所は、陸別の道の駅の前です。こういうことがまた起こったのですね。このニ

ュースをみて、野下さんにメールをしましたところ、翌日次のような返信をいただきました。

「もはや寒さは耐えるものではなく、楽しむものだといいたいところですが、今朝も-30℃近くまで冷え込んでいます。わたしの生家は、土壁にまさ屋根のお粗末な住宅に家族7人が、薪ストーブを囲み、暖を取り合っていました。そのことを思えば、今は天国です。

関寛翁が開拓した頃は、閉ざされた奥地で春を待ち望み凌いでいたことでしょう。

来月4日・5日には、4年ぶりの第40回「しばれフェスティバル」の開催に向けて準備が進められています。寛翁の託した魂を受け継いだ象徴としてのイベントになっています。」

寒い寒いと言っている毎日ですが、同じ日本にもこのような気温の中で生活をしている方もおられるということを、皆様にもお伝えします。

